

創業の地、思い出深い岩見沢を訪ねて

—— 1960(昭和35)年

～塩谷 宏 北海道旅行記～

(前略) 青年の頃から一度は北海道の地を訪れてみたい、少年時代を過した、所謂、蝦夷^{いわゆる えぞ}の地は年を経るに従って恋しくもあり懐かしくも偲^{しの}ばれて、堪^{たま}らなく懐かしく思って口マンチックな想い^{ふけ}に耽^ふったのである。

雄大な大陸的な北海道、荒漠たる石狩原野、原始林の生い繁った地に初めて農場経営に当たった人、その入植当時を思うと感極まる情緒にひたるのである。雪、馬櫓^{うまぞり}、馬鈴の音、小豆^{えんばく}、燕麦、林檎、グスベリー、五升薯^{ごしょうも}、南瓜、吹雪、角巻、ストーブ、土居、葺^うの屋根、温和な然も開拓精神の横溢した人々、苦勞^{うら}の裡に明日への希望を持つ人々、そうした環境の中で私は育てられたのであった。二里(約8km)の道を雪中、姉とそい二人で通った峯延小学校がとても懐かしく偲^{しの}ばれていたこそ、今度の渡道が実現したのである。

(中略) 南田恒吉氏を訪問する。(中略) 嘗て在道時代、少年の私は彼氏に学校の往復を馬櫓^{うまぞり}に乗せてもらったものである。(中略) 特に老婆が健在でとても喜んでくれた。初め父(注：塩谷範次)と間違えていた。少し耳が遠い精か一寸通訳が居る。「アアあちゃんか」と初めて了解がついた時は、遠い昔の四十年前の少年の頃が偲^{しの}ばれて懐かしかった。父がこの一家の面倒をみたことは、実の兄弟か親類同様であったと思う。それを彼氏は非常に徳としているらしい事が言語の裡にハッキリうかがえる。人には親切を尽くすべきだと思った。

大願寺に立寄ったが寺僧は留守であって老夫人にお目にかかった。この寺も父が伊藤家よりかなりの援助金を出させて建立に尽くしたものである。上棟式の時、父が紋付袴で餅撒きをし、みんなが面白がってこれを拾ったものだ。この寺の庭で毎年盆踊りがあった。「西が曇れば雨とや一ら」等といった一節を記憶している。

この付近は沼地湿地でガマが一面に生い繁り、川柳が繁茂^{いえど}していて、四十年を経たと雖もよくまあこんなに変化した

ものと思われる。このままだと内地の田園風景と少しも変わらない。ただ、家が点々とあり村落をなしていないだけの相違である。この大願から峰延へ出る所に樺戸街道^{かばと}がある。四十年前は全くの泥^{ぬか}るみの道で、道よりむしろその溝を越えた畑^{あぜみち}の畦道を人達は通行したものである。それが今では舗装こそしてないが、鉄道バスが二十分毎に発車しているよい道となり交通の便もよくなっている。実に隔世の感が深い。

柳の大樹は枯れ果てて二代目が今直径一尺(約30.3cm)位になっている。この木の側に陸地測量部の三角点があって、我々遠方からの通学者の目印になり、ここまで帰ったら道程約半分と少年ながら安堵したものである。空見橋傘形松、この松は無い。之等は開墾^{これら}当時の人達が心の寄り所として育てていたものだが、後の人はその意を了解出来ぬのであろう。

三頭立の馬でプラオを操り一望何の邪魔ものの無い石狩の大平原を耕す人。入植という言葉はその当時はなかった。開墾^{はん}といていたと思われるが、その開墾^{はん}当時の苦勞は想像に絶するものがあつたのである。榛^はの木を伐ってそれを柱とし、アイヌ藁^{わら}を刈り取って屋根とし、土の上じかにアイヌ藁^{むしろ}を敷きつめてその上に蓆^{むしろ}をしいた生活。床や棚等はなく全くの掘立小屋、それも手製の家である。少年であつた私は冬、寒中にアイヌ藁^{わら}(草の類)で家を修繕するのに手伝わされて、その手の冷さに随分悩まされたものである。

父は伊藤農場の監理者として赴任したのだから、昔風に考えて御主人様に対しての一点張りで毫も私心私慾無く、私達が使う鉛筆一本に至るまで記帳して、その明細をあきらかにしたものである。私は当時子供心に奇異を感じたものである。(後略)



塩谷 宏の北海道旅行記(昭和35年)

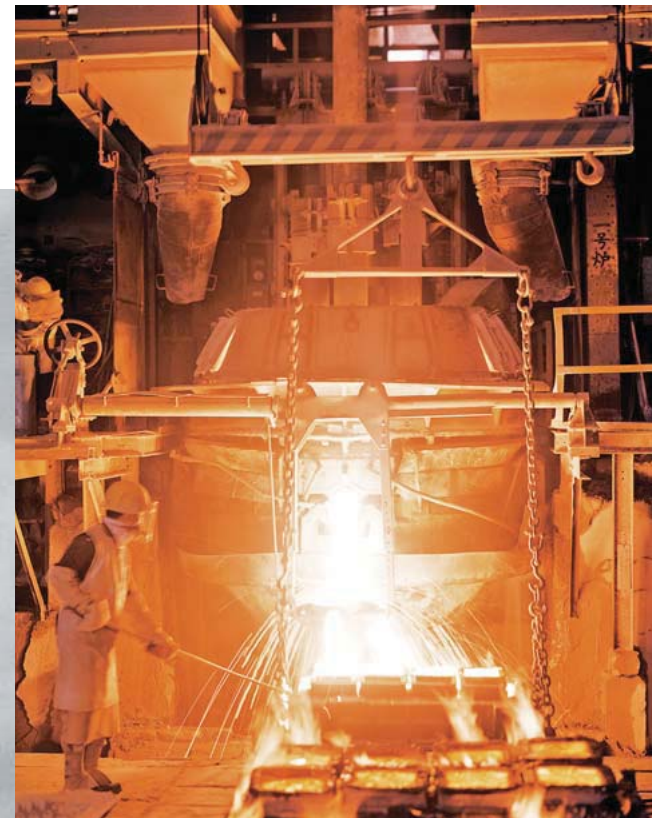
倉庫業に進出し総合物流システムを構築

—— 1961(昭和36)年

1960年代に入ると相次いで新しい事業免許を取得し、これにともなって事業内容は着々と拡充していった。1961(昭和36)年、不特定多数のお客様の貨物輸送が可能な一般区域貨物自動車運送事業免許を取得したのを皮切りに、1968(昭和43)年には港湾運送事業法改正にともなう船内荷役事業免許を、その3ヵ月後には委託された物品の保管業務にあたる倉庫事業の許可を取得することによって、輸送業務と倉庫業務を2本柱とする総合物流システム構築への第一歩を踏み出した。また建設分野では、旭硝子㈱伊保工場の構内に鉄工作業場を設置し、主として工場建設などに使用する鉄骨材の加工に着手した。



旭硝子㈱伊保工場のジルコナイト新工場



旭硝子㈱伊保工場の電鍍レンガ電気炉



中島倉庫(昭和40年代)



梅井倉庫(昭和40年代)



初めてトラックに「旭硝子」の文字を入れることが許された記念すべき第1号車(昭和30年代)